



沖縄大学図書館

第42号

2006.4.1

館報 南十字星

発行：沖縄大学図書館

〒902-8521

沖縄県那覇市字国場555

TEL (098) 832-5577

(館報 南十字星)

FAX (098) 834-1127

新刊紹介

Language and Space: Cognitive Semantics of Sinhala Grammatical Categories

(Sarvodaya Vishva Lekha 2005年)



人文学部教授 デイリープ・チャンドラール

私は日本にいる間に日本語で一冊の本を出したいという夢をもっている。たぶんそれはただの夢で終わるだろう。

今回紹介するのは、私が英語で書いた専門書である。本のタイトルは日本語に訳すと、「ことばと空間、シンハラ語の文法カテゴリーの認知意味論」になる。私の博士論文のテーマであった「空間的概念と言語表現の関連性」が元になった。ことばと空間の間に何の関係があるのか、と思われるかもしれないが、まさに表現構造の起源が物理的空間構造と切り離せない、というのが私の主張である。

上の文中にある「ことばと空間の間」という表現に注目せよ。この「間」はある抽象的概念を明らかにするために使った表現だが、もともとは、「石と石の間には砂がある。」などと物理的空間を表すことばであった。それが、「食事と食事の間に」（事柄の間）、「私の生きている間は」（時間）、「二人の間はうまくいっていますか」（間柄）などとより抽象的な意味への広がりをもつようになった。

注意して見ると、上の文中にある「元になった」、「明らかにする」、「もつようになった」などの表現ももともとは物理的意味で使われており、あとから抽象的な意味を表すようになったものである。

このような類の表現はメタファーという。光を与えることによって、よく見えるようになる。それがまた「明からかにする、説明する」（英語ではthrow light on）という表現になった。これは光のメタファーである。“Time is money”は、お金を使って時間のことを表すメタファーである。「両手に花」はフラワー・メタファーを使っている。

このように日常言語の中に頻繁に現れるメタファーのなかでも基幹的働きをしていると考えられる空間メタファーを主なテーマにした。言語データは主にスリランカのシンハラ語からとった。要するに、この本は少数系の言語であるシンハラ語に注目し、認知言語学的観点から文法的表現の意味的広がりを説明しようと試みたものである。

空間メタファーにはいろいろあるが、出発点として存在のメタファーを考えよう。私たちの周りにあらゆるものがある。この「もの」が「ある」という考えを言語的思考の出発点としてもみなすことができる。ただ、あるのはものだけではない。出来事もある。「コンサートがある。」また「時間がある。」同じパターンを使い、抽象的な存在を表す。「心がある。」「悩みがある。」さらに「彼のことに重みがある、温かみがある」などの表現の「ある」だけではなく、「重み」「温かみ」もメタファーであるので、重なるメタファーの例。存在するところは「ことば」で、それを「に」という文法的表現で表している。

空間メタファーの中に、広い範囲に渡った移動・運動のメタファーがある。世界中のあらゆるものが移動するのと同じく、抽象的要素も移動する。移動には、基本的に、起点、経路、そして終点がある。日本語では、「から」が起点、「へ」と「に」が終点を表す。このような助詞が付いた表現は必ずしも物理的場所を表すとはかぎらない。「から」は「責任感から」、「間違ったから」などのように原因・理由を表すことが多い。「に」は「君にお願いしたい」、「目標に向かって頑張る」などと方向・目標を表す。

人間がメタファー的思考能力をもつから、このような空間的表現を使って、限られたことばで様々な経験・考えを語るができる。だから、メタファーは、私たちの言葉（「言の葉」）と発想に花を咲かせる重要な思考手段でもある。日本人はエコノミック・アニマルと言われていたが、人間はメタフォリック・アニマルである。本は私の母語を通してこのことを訴える。「母語」の「母」もちろんメタファーである。

大塚 直・北村喜宣【編】

『環境法学の挑戦』

(日本評論社 2002年発行)



法経学部助教授 朝賀 広伸

「持続可能な開発」に向けて、教育の担う役割の重要性が、1992年のリオ・サミットにおいて確認され、2005年からの10年を「持続可能な開発のための教育の10年」とすることが国連で採択された(第58回国連総会本会議、2003年12月)。

グローバルなレベルからローカルなレベルまで、環境悪化のスピードに追いついていない現状が存在し、これまでの対症療法的な解決がほころび始め、環境をとりまく多くの問題や事態の打開は喫緊の課題となっている。「持続可能な開発」を進めていくためには、各国政府、国際機関、NGO、団体、企業等あらゆる主体間での連携を図る必要があり、永続的な解決を促進するためには基礎教育、高等教育、教員教育、環境教育等を充実させ、市民の教育・啓発活動を粘り強く展開していくことが必要である。

法学は、公害にはじまり、これまでの環境問題の経験を十分に踏まえ、実効的な被害救済と予防、良好な環境の回復と創造に向けて、理論的・実践的な取組を行ってきた。このような取組により「環境法学」として認知されるようになり、法科大学院制度に基づく新司法試験の選択科目ともなっている。こうしたなかで、「持続可能な社会」を構築するための法解釈論・法政策論を開発・提供することは、環境法学の有する社会的責務のひとつといえよう。

本書は、基礎的法理論を重視しつつも、関連学問分野への配慮、その知見の吸収・応用の必要を認識し、持続可能な社会を志向する新たな世紀の環境法システムを構想・探求するものである。環境法学の果敢な挑戦として、23本の論文による議論を収録し、環境法について初歩的な知識を有する読者を上級レベルの議論へと招請するものである。本書の内容について、まず環境法の基本問題として、公害・環境問題の歴史、環境権、地方分権と環境行政、環境損害責任、市民参加等を取り上げて、環境法の総論的課題を中心に論じている。

わが国の環境法は、公害に対する損害賠償請求訴訟を契機として発展し、汚染者の法的責任を明確にしたうえで被害者救済をはかり、公害防止と救済制度を発展させてきた。その後、生活環境アメニティや自然保護等にも環境法の対象範囲が拡大していくなかで、環境権の議論が起こり、環境

侵害行為の差止めを請求する根拠とされる私法上の環境権が主張されることで、人格権の保護範囲の拡大に議論が発展した。さらに、環境共有の法理から市民の環境における共同利用とその秩序維持、内容形成に参加する公共性のある権利構成へと議論を発展させた。公共性という観点から、環境法の多くは行政法に基づくこととなる。分権時代の趨勢とも重なり、地域の環境特性との関係から、自治体における環境行政は、独自の方針、基本条例や計画等を策定することが必要となり、この中に住民意思の反映や環境権の組入れが要請されることとなる。そのための情報提供や住民参画も同時に求められることとなる。本書は、これらの環境法に関する重要な個別論点について、より深くかつ広く議論を行なっている。

さらに、本書では、環境保全のための手段と手法として、環境税の法律問題、環境協定、環境管理、環境アセスメント、環境規制執行と執行法政策、環境訴訟等についても論じている。その他にも、国際環境法、循環型社会の法システム、環境リスクの法的対応、環境規制と独占禁止法、環境倫理と法等の重要なテーマについても論じられており、非常に多くの示唆や提言を含んでいる。

本書を読むことで、問題の真の解決のためには、法制度の整備だけにとどまらず、それを支え、後押しする人の連帯を築いていくことが不可欠の要素であり、環境問題に対する意識啓発の重要性を再認識した。目の前の危機を看過するのではなく、自分のできることから行動を開始する。この意欲的な挑戦を国レベルだけでなく、地域レベル、個人レベルで力強く進めていくことが求められる。教育こそ、一人ひとりが環境問題を自身の問題として捉え、共通の未来のために、心を合わせて努力していくことの原動力となるものと確信している。具体的方途として、(1)地球環境問題の現状把握と学習(2)持続可能な未来志向型のライフスタイルへの見直し(3)具体的行動を開始するためのエンパワーメント(力を与える作業)と問題解決のための協働、の三つを段階的に踏まえつつ、総合的に着実に進めることが大切ではないかと考える。

2006年9月にはISO14001の発行から10周年を迎えることとなる。将来を志向して、環境教育を充実し、環境をマネジメントすることが一層求められる。

マイクル・シャーマー 岡田靖史(訳)

『なぜ人はニセ科学を信じるのか I 奇妙な論理が蔓延するとき』

『なぜ人はニセ科学を信じるのか II 歪曲をたくらむ人々』

(早川書房 2003年発行)



人文学部助教授 小 渡 悟

科学的な思考法という言葉がある。ここでいう“科学的”ってどういう意味でしょうか？また“科学的な解説”とはなんのでしょうか？大学の先生（白衣をつけた偉そうな先生？）が小難しい専門用語を散りばめつつ、やはり小難しい話をしているのを想像するのでしょうか。“科学的”を辞書で調べてみると「かがくてき(クワガク…)【科学的】〔形動〕ある事物に対する説明や行為が科学の方法に合っているさま。実証的、合理的、体系的で正確なさま(国語大辞典(新装版)(c)小学館1988)」とあります。“科学的”というのは、頭の中で考えて語るだけでは駄目で、説明に矛盾が無く論理的で、かつ、然るべき手順さえ踏めば第三者でも検証可能でなければならないということです。なにも偉そうに話すことでも、相手を小難しい話で煙に巻くことでもありません。さて、ここでまわりを見回してみると科学的根拠は全く無いのに、いかにも科学的に立証されたかのように装っている非科学的な、いや、意図的に科学的なもののように装っている“ニセ科学(一見すると科学的な根拠がありそうだが、実際にはそのようなものが無い)”なものがあるのに気がつくでしょう。

えっ！？「私の身の回りにニセ科学のものはありません」ですって！？うーん、それはニセ科学に騙されている可能性が非常に高いですね。周りのものすべてが無矛盾で正しく思えた時点で判断力が失われています。マイクル・シャーマー著『なぜ人はニセ科学に信じるのか』を読むことをお勧めします。ここでは手軽に読めるI、II巻に分かれている文庫版を紹介します。「超能力は存在する」「異星人に誘拐された」「ナチスのホロコーストはなかった」「ダーウィンの進化論はまちがっている」等々、この本はニセ科学の具体例を挙げていき、それらに共通する騙しのメカニズムを解説しています。これらを通して懐疑の心(難癖をつけるという意味ではありませんよ)の大切さを知りましょう。特に文庫本ではI巻に収録されている「第3章 思い違いのメカニズム 奇妙な現象をもっともらし

くみせている25の嘘」は必読です。少し例を挙げると、偶然の一致の項では“パーティーで出会った30人のうち同じ誕生日の人がいた！すごい偶然！”“好きな人に電話をしようとしたら、その人から電話がかかってきた！テレパシーみたい！”があげられています。これらは確率的にみると実は偶然とはいえないのです(ニセ科学ではこの偶然ではない“偶然”を強調します)。本書でも「行動心理学者であるB.F.スキナーは実験室で、人の心はいくつかの現象を関連づけようとし、たとえ実際に存在しなくてもそれを勝手に見つけてしまうことがあると証明してみせた。」とも述べられています。人間は偶然でもなんでも無いことを偶然の一致として思い込むことが多々あるということです。これら25の嘘を知ることは、ニセ科学に対してだけでなく、詐欺など日常的にも陥りやすい罠に対しても非常に有効です。

この本を読んだ後ですと、科学的に考えると血液型占いもおかしいというのに気がつくでしょう。実際、心理学では血液型と個人の個性の間には関連性は無いという結論がでています。それなのに“血液型と性格は関連がある”という前提で話を進めるのはニセ科学といえるでしょう。最近の身近な例でも「ゲーム脳」「水からの伝言」「マイナスイオン」「電磁波防止シール」なども科学的に考えるとかなり怪しいものだといえるでしょう(まあ、それ(ニセ科学)も踏まえた上で楽しむのならよいのですが)。

ちなみに、私はすべてのことを科学的に考えて行動しなければならないとは思っていません。他人に迷惑さえかけなければ、たまには非科学的なことを考えて行動するのも楽しいものです。人間は科学的な思考ができますが、同時に非科学的なことも考えることができるのですから。それが人間というものです。そのためには、科学的なもの(科学的なもの)とニセ科学(非科学的なもの)の区別がつけられないといけませんので、ぜひともこの本を読むことをお勧めします。

滝本竜彦 著

『超人計画』

(角川書店 2003年発行)



法経学部法経学科2年次 河守好和

「我は人間に其存在を教へむとす。即ちそは超人なり、人間の黒き雲より来る電光なり」。フリードリッヒ・ニーチェ著、ツァラトゥストラより

こんな大仰な抜粋からこの「超人計画」は始まります。形式はエッセイ。主人公は著者自身。一応小説家。

この著者が「超人」になろうとエリ・エリ・レマ・サバクタニ！（カミよ、カミよ、なんぞ我を見棄てたもうや！）と叫んだり、もがいたり、いじけたりと孤軍奮闘します。

著者の名前は滝本竜彦。1978年北海道生まれ。著者曰くこの生誕の地が日本でもトップクラスの僻地で、ノリもバリバリの体育会系だったらしく、生まれつき運動神経が死んでいて貧弱なもやしっ子だった著者は、その地でかなりの劣等感を抱え込んだとのこと。高校は札幌で下宿。大学進学と共に東京に上京してきますが、北海道時代に溜めに溜めた劣等感とルサンチマンと自意識過剰と都会の風当たりの強さに耐えかねて部屋にひきこもってしまいます。開拓者精神もどこ吹く風です。

ここまでのくだりで大半の人が気分を害したと思われそうですが、簡単にいうとこの本はハゲ（ひきこもり中の不摂生が原因）ひきこもりの著者が、普通に社会に出て普通に働き普通に生活し普通に友達がいって普通に彼女がいるそんなごく普通の人、著者曰く「超人」を目指して烈火の如く妄想し暴走する魂の絶叫の記録です。

僕も著者ほどではないにしろひきこもりの素養をしっかりとこの身に含んでおるため、この著者の雄叫びに共感できる箇所もそこかしこにあるのですが、それにしてもこの著者の肥大化した自意識によるトンチキぶりには本当凄まじいものがあり、それはまるで100メートル走をスタートと同時に全力で逆走するかの如く。

例えば著者には恋というものが分かりません。故郷の僻地で恋愛カーストの最下層に組み込まれていたこと、またそのために現実的な恋愛を

拒絶し、バーチャルな恋愛へとひた走ってしまったことが主な原因です。ちょっとしたロマンスもあるにはありましたが、それも早とちりと男気の欠如でご破算です。

早い話が彼は後悔しているのです。そのために脳内彼女（要は妄想による空想上の彼女）という切なくなるほどアブナイ代物まででっち上げてしまいます。

それを乗り越えるためか、著者は永劫回帰という思想を持ち出してきました。

それは発狂寸前のニーチェが思いついた恐るべき概念で、その概念とは現実の世界は永劫回帰、即ち意味も目的もない永遠の繰り返し、だったらそれを受け止め今この現在の充実こそ一所懸命に励もうというものであり、著者もそれに習い雄々しく唱えます。もはや過去は過ぎ去り未来は存在しない。ただ今この瞬間だけが存在する。私は全てを肯定する！と。

でも当然ですが無理です。ひきこもりも改善しません。そんな自分に鞭打つべく、更に著者はあさっての方向へ邁進していきます。

ある時はNHKからのひきこもりについて考える番組への出演要請に応じ、スタジオで愛を叫び、またある時は過去を衆目に晒し、更には一大決心をして渋谷へと赴き、そして最終的には箱根へ一人旅なんかもする。

でも何の変化もなく、「超人」も到来しません。次第に著者は倦怠感に襲われ、結局何も解決せず振り出しに戻ってこのエッセイは幕を閉じます。何だか救いのかけらも無いような内容ですが、この著者現在はマンガの原作もやっており収入もあるみたいですし、先日何と結婚もしたようで、完全に「超人」を熱望していた自分は過去のものとなったようです。

普通に読むとゲンナリするだけの代物ですが、こうしたことを踏まえて読んでみると人生、何とかなるもんなんだなあ、と妙に励まされる？一品かとは思います。

森谷 雄 著

『シムソズ』

(ポプラ社 2005年発行)



人文学部国際コミュニケーション学科4年次 仲 嶺 和 樹

みなさんは何か1つのことに一生懸命になったことはありますか？将来のことについてはありません。なんでもいいです。資格を取得する。英文日記を毎日書く。スポーツに打ち込むなど。将来を見つめるのではなく現実。今、何をしたいのかが問題ではないのでしょうか？ここではそんな高校3年生の1人の女の子が進路も何がしたいのかも決まらず夏休みを迎える1つの物語からなっています。私たちにもそんな時期がなかったではないでしょうか？みんなの進路が決まっていく中、1人とり残されるような時期がなかったではないでしょうか？少なくとも私はその中の1人でした。進路も何も決まらずゴロゴロとすごした夏休みが。ただ1つ、はまることがありそのことに一生懸命になっていました。それはフルマラソンやハーフマラソンといった一般でも誰でもでれる地域的な競技でした。スポーツの得意な私にとって担任が誘ってくれたので出てみようと思い、夏休みを通し基礎トレーニングに励んでいました。そうしたこととダブって見えたのでこの本にしようと思いました。

彼女の名前は伊藤和子。スポーツ好きな高校3年生。北海道常呂町に住んでいて、夏休み前なのに、いまだに進路に悩まされていた。担任の大河内先生がそのことについていろいろ相談してくるのだがなかなか決まらず、彼女の特徴を生かして、体を動かす仕事はどうだろうとライフセービングの講習会の参加を進めてくれた。しかし、「面白そうですね！」の一言で終わってしまう。なぜならどんな仕事なのかもわからないし、何より彼女はこの常呂町が好きで離れたくなかったらしい。なぜなら、山や川がきれいだし、マラソンやサイクリングのイベントが多く、国内はもちろんのこと、海外からも人が集まるし、町の人たちは人柄もあたたかい、話をするのが好きだったからだ。そんな中、夏休みが始まった。

彼女にはいつも行きつけの喫茶店があった。喫茶店「しゃべりたい」だ。「流水ソーダ」が評判らしく名前の由来は、マスターのシャレから生まれたそうだ。そこは彼女にとってもっとも情報源の場所らしくカーリングで有名な加藤真人の追っかけであった。ここ常呂町ではイベント以外にもカーリングで有名な地域でもあった。

カーリングとはなかなか知られていないスポーツだろう。なぜならカーリングがオリンピックとして始まったのは長野オリンピックからだから。スポーツ好きな私でさえもカーリングのことについては全然わからなかった。どういったスポーツかというと、大きな石（ストーン）を滑らし45メートル先のポイントへいかに近づけるといふスポーツ。ストーンは両チーム8個づつあり相手の石にあてて、そのポイントからはずして、いかに自分たちチームの石をポイントへ近づけさせるかが勝敗の決め手となるそうです。簡単にいえば「氷上のチェス」ともいわれているそうです。

そんなスポーツ選手であった加藤真人の最新情報を知りたく喫茶店へ向かったのがでした。そこで得た情報がエキシビジョンマッチのイベントに参加する情報を聞き8月中にカーリングチームを結成すればそのイベントに参加できるという情報を聞きチームを結成することにきめたのがでした。そこで集めたメンバーは皆、なじみの同級生でした。美希と菜穂と史江といったメンバーで和子と美希以外は体育にまったくの無縁で始めは毎日、大河内先生のもと基礎体力作りから始まり、筋肉痛に顔をゆがめながらもがんばっていくのでした。

そして季節が変わり10月。カーリングの季節到来。やっとホールがアイスメイク（カーリング場に氷を張ること）し、カーリングホールがオープンされるのでした。そこでカーリングの経験をつむためにチーム結成後の初めての練習試合をするのですが、試合中にケンカになり負けるのでした。それと同時に解散の危機までいたり、チームメイトの史江が両親にカーリングをしていることを隠していたのがばれて辞めさせられそうになったりするのですが、皆で説得しにいたりして克服。更にチームの輪が深まっていきます。そしてエキシビジョンマッチ。あたたか相手は強豪チームなのですがとてもいい試合をします。そしてその後・・・。

この本を読んで何か1つのことに一生懸命になるということはとてもいいことだと思いました。夏のドラマ、「ウォーターボーイズ」もこの本と似ている部分があるのではないかと思います。あなたもこの本を読んで、自分のしたいこと、やりたいことにはまってみてはいかがでしょうか。

辛 淑玉 著

『韓国・北朝鮮・在日コリアン社会がわかる本』

(株式会社パーケイエンターテイメント 1995年発行)



福祉文化学科2年 島 袋 さつき

私は、福祉文化学科の学生ですが、タイトルからは、国際コミュニケーション学科の学生が読みそうな本だと思う。私は福祉を専攻しているので、福祉に関する本を紹介しようと思ったが、どうしてもこの本を皆さんに紹介したいと思った。それだけ私にとって強く印象に残るものだった。また、この本は学科を関係なく読める本だと私は思う。

私がこの本に出会ったのは、予備校に通っているときだった。予備校の本棚を何気なく見ていたら、この本が目に入った。私は韓流ブームになる前から韓国に興味を持っていた。なぜ、私が韓国に興味をもっているのかというと、沖縄は北朝鮮、韓国と似ていると感じているからだ。私には、歴史や文化に関する専門的知識はない。しかし、沖縄の歴史、食文化、沖縄方言、人情など、とても似ていると思う。この本を読むことで少しでも韓国に関する知識を得たいと思った。また、この本を通して在日コリアンの人たちの人権や日本人が韓国、北朝鮮、在日コリアンに対してしてきた酷い仕打ちなどを知り、複雑な気持ちになった。自分も持っている韓国に対する気持ちが熱くなった。

日本は、2002年に行われた日韓ワールドカップをきっかけに韓国ブームを迎えた。ドラマや俳優、歌手が日本のテレビや雑誌でよく目にするようになった。特に、韓国ドラマ「冬のソナタ」は爆発的な人気を集めひとつの社会現象にもなった。しかし、韓流ブームが訪れるまで、私たちは「韓国」という国をあまり意識しなかったのではないだろうか。また、華やかにみえる韓国社会とは反対に、謎の多い北朝鮮。北朝鮮のイメージといえば、将軍様万歳や拉致問題、核兵器のイメージがある。もともと韓国と北朝鮮

はひとつの国である。1945年に日本の植民地から解放された朝鮮半島は、複雑な国際情勢の中に投げ込まれた。

現在、38度線を境に冷戦状態が続いている。北には、共産党主義大国の旧ソ連の支持を受けた金日成（キム・イルソン）将軍の政権が生まれ、南には、アメリカの後押しを受けて自由主義社会を標榜とする李承晩（イ・エイマン）政権ができた。どちらも臨時政府であったが、それに応じて日本における在日コリアン社会も分断されてしまった。いま、在日コリアン社会では、「在日韓国人」といえば韓国を支持し、「在日朝鮮人」といえば北朝鮮を支持しているように受けとる。在日コリアンは、日本の植民地支配の結果として、日本に定住を余儀なくされ、サンフランシスコ講和条約発効まで日本国籍保有者として日本で生活してきた。つまり、外国人として日本に来たのではなく、皇国臣民として日本にいた。しかし、日本の生活は彼らにとって残酷なものだった。彼らに投げかけられる言葉も世代や環境によって異なると書いてある。例えば、「国に帰れ」「いつまでいるの」「にんにく臭い」「朝鮮人だということは内緒にしてあげる」など、数え切れないほどある。特に、「国に帰れ」という言葉は許せないと思った。この発言は、植民地支配に対する責任意識がないと私は感じた。

北朝鮮や韓国人、在日の人々が反日感情をもつのも理解できる。

この本を読めば読むほど、もっともっと朝鮮、韓国、在日コリアンについて知りたくなった。この本は、人として考えさせられる内容なので皆さんも是非読んで欲しい。また、「在日コリアンの胸のうち」もおススメ。

新着図書案内(抄)

請求記号	書名	著者名	発行所
007.35 So39 015 C47 154 Ka18 210.182 N73 1-3 288.44 Ta59 290.13 Ke24	変貌するコンテンツ・ビジネス：メディア・ソフト市場のこれから 図書館を使い倒す！：ネットではできない資料探しの「技」と「コツ」 掃除道：会社が変わる・学校が変わる・社会が変わる 日韓歴史共同研究報告書 語られなかった皇族たちの真実：若き末裔が初めて明かす「皇室が2000年続いた理由」 景観生態学：生態学からの新しい景観理論とその応用	総務省情報通信政策研究所著 千野信浩著 鎌山秀三郎著；亀井民治編 日韓歴史共同研究委員会編集 竹田恒泰著 モニカ G. ターナー，ロバート H. ガードナー， ロバート V. オニール著；名取睦 [ほか] 訳 衣斐成司，大島俊之，増成牧編 高田裕成 [ほか] 編 廣田裕之著 小塩隆士著 鳥居徹也著 太田敬志 [ほか] 編 浦河べてるの家著 岡崎勝，保坂展人編著 ドロシー・コウ著；小野和子，小野啓子訳 サラ・ブラファード・ハーディー著；塩原通緒訳 矢吹紀人著 ドネラ・H・メドウズ [ほか] 著 環境ビジネスウイメン懇談会編著 矢作弘著 野田尚史編 加藤重広著；町田健編 大西泰斗著 麻生直子編 村上春樹著	東洋経済新報社 新潮社 PHP研究所 日韓歴史共同研究委員会 小学館 文一総合出版 法律文化社 商事法務 アルテ 日本経済新聞社 三笠書房 クリエイツかもがわ 医学書院 ジャパンマニシスト 平凡社 早川書房 大月書店 ダイヤモンド社 日経BP社 岩波書店 くろしお出版 研究社 日本放送出版協会 梧桐書院 新潮社
324 Y77 327.2 F79 337 H74 364 O77 366.8 To67 367.99 Ko21 369.28 U82 371.42 Sa81 383.7 Ko11 469 H97 上・下 493.152 F64 519 C44 519.04 Ka56 673.8 Y16 810.7 Ko69 810.8 Sh88 6 835 O66 911.568 J76 913.6 Mu43	ようこそ民法一周の旅 企業紛争と民事手続法理論：福永有利先生古稀記念 地域通貨入門：持続可能な社会を目指して 人口減少時代の社会保障改革：現役層が無理なく支えられる仕組みづくり フリーター・ニートになる前に読む本 子どもたちと育みあうセクシュアリティ：児童養護施設での性と生の支援実践 べてるの家の「当事者研究」 佐世保事件からわたしたちが考えたこと：思春期をむかえる子と向きあう 纏足の靴：小さな足の文化史 マザー・ネイチャー：「母親」はいかにヒトを進化させたか 水俣病の真実：被害の実態を明らかにした藤野紘医師の記録 地球のなほし方：限界を超えた環境を危機から引き戻す知恵 環境ビジネスウイメン：11人成功の原点と輝く生き方 大型店とまちづくり：規制進むアメリカ，模索する日本 コミュニケーションのための日本語教育文法 日本語用語論のしくみ 英文法をこわす：感覚による再構築 女性たちの現代詩：日本100人選詩集 東京奇譚集	加藤重広著；町田健編 大西泰斗著 麻生直子編 村上春樹著	法律文化社 商事法務 アルテ 日本経済新聞社 三笠書房 クリエイツかもがわ 医学書院 ジャパンマニシスト 平凡社 早川書房 大月書店 ダイヤモンド社 日経BP社 岩波書店 くろしお出版 研究社 日本放送出版協会 梧桐書院 新潮社
<琉球弧関係>			
R201.6 N71 R302 C43 上 R321 H81 R369 Ka86 R510 O52 R960 Y87	日露戦争百年：沖縄人と中国の戦場 地域の自立シマの力 法学：沖縄法律事情 おきなわ福祉の旅：それぞれの現場・地域での出会いの中で 沖縄の土木遺産：先人の知恵と技術に学ぶ 島唄の奇跡：白百合が奏でる恋物語，そしてハンセン病	又吉盛清編著 新崎盛暉，比嘉政夫，家中茂編 新城将孝 [ほか] 編 加藤彰彦著 「沖縄の土木遺産」編集委員会編 吉江真理子著	同時代社 コモンズ 琉球新報社 ボーダーインク 沖縄建設経済会 講談社

(この案内は、2005年10月～2006年3月に受け入れた新着図書の抄録である)

貸出トップ20

(2005年10月～2006年3月)

順位	請求番号	タイトル / 著者名	貸出回数
1	361.45 N67	外国人とのコミュニケーション / J.V.ネウストプニー著	14
2	810.8 A85 9	言語行動 / 荻野綱男編	12
3	830.7 Su96	日本人はなぜ英語ができないか / 鈴木孝夫著	11
//	913.6 Mu43	東京奇譚集 / 村上春樹著	//
5	049 Sh82	生協の白石さん / 白石昌則，東京農工大学の学生の皆さん著	10
6	664.76 Mu41	エビと日本人 / 村井吉敬著	9
//	913.6 Ta19	ドリームタイム / 田口ランディ著	//
//	913.6 W47	蹴りたい背中 / 綿矢りさ著	//
9	726.1 O26 1	ダーリンは外国人 [1] / 小栗左多里著	8
//	801 Sh69	新世代の言語学：社会・文化・人をつなぐもの / 飯野公一 [ほか] 編著	//
//	815.8 Ki24	敬語再入門 / 菊地康人著	//
//	913.6 Ka52	蛇にピアス / 金原ひとみ著	//
//	913.6 W47	インストール / 綿矢りさ著	//
14	302.23 Mu41	漫画で読む東南アジア / 村井吉敬編	7
//	333.8 N43	国際協力の新しい風：パワフルじいさん奮戦記 / 中田正一著	//
//	336.42 N43 2006-1	面接の達人 [2006]：バイブル版 / 中谷彰宏著	//
//	726.1 O26 2	ダーリンは外国人 [2] / 小栗左多里著	//
//	837.7 oxf s	Sally's phone / Christine Lindop ; illustrated by Gavin Reece	//
//	913.6 H11	パッチギ! / 羽原大介，井筒和幸原案；朝山実著	//
//	913.6 Mu43 上	半島を出よ / 村上龍著	//
//	913.6 Sh82	野ブタ。をプロデュース / 白岩玄著	//
//	933 R78 5-上	ハリリー・ポッターと不死鳥の騎士団 / J.K. ローリング作；松岡佑子訳	//

図書館事情

- 2005年 4月1日 図書館報第40号発行
 4日 入学式・新入生図書館利用オリエンテーション
 21日 私立大学図書館協会西地区部会九州地区協議会（田里修館長出席）
 22日 九州地区大学図書館協議会総会（田里修館長出席）
 18日 新入生図書館ツアー開始 5月25日まで
 5月13日 私立大学図書館協議会西地区部会第1回幹事会（田里修館長出席）
 17日 第1回図書館運営委員会
 議題：1. 2005年度予算について
 2. 図書館編集委員長の選出
 3. 学生用図書購入について
 20日 個人情報保護講習会（沖縄キリスト学院大学）
 6月7日 県大学図書館協議会第1回企画委員会
 17日 私立大学図書館協会西地区部会総会・講演会（沖縄国際大学）
 21日 第2回図書館運営委員会
 7月5日 平成17年度情報セキュリティ担当者研修会（整理係主査 金城直樹出席）
 19日 陽明高等学校インターシップ生3名受け入れ
 28日 県大学図書館協議会総会・講演会（名桜大学）
 8月22日 蔵書点検のため8月22～24日迄閉館
 9月9日 平成17年度私立大学図書館九州地区研究会（田里館長、整理係主査 金城直樹出席）
 28日 沖縄工業高等学校インターシップ受入（3名）9月30日まで
 10月1日 図書館報第41号発行
 14日 県大学図書館協議会第2回企画委員会
 18日 第3回図書館運営委員会
 11月18日 私立大学図書館協会西地区部会九州地区協議会準備委員会（整理係主査 金城直樹出席）
 19日 推薦入学試験
 12月9日 私立大学図書館協議会西地区部会九州地区協議会幹事会（田里修館長出席）
 2006年 1月21・22日 センター試験
 2月11・12日 一般入学試験A日程
 3月5日 一般入学試験B日程
 10日 卒業式
 19日 一般入学試験C日程

2005年度 利用状況 (2005年4月～2006年3月)

開館日数	267日	図書貸出冊数	13,528冊
入館者数	93,193名	文献複写	1,649 (15,335枚)
貸出者数	7,121名		